十神山

会報
安来節
YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会
〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854－28－9988
FAX 0854－28－9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

これからの安来節と就任挨拶

資格審査長　中本實夫（尾高支部）

資格審査長就任に当たって会員の皆様初め関係者の皆様、全国の安来節愛好者の皆様に一言ご挨拶申し上げます。

安来節は山陰地方の代表的な民謡で、日本の文化の一つとして日本全国はもとより、今海外でも中国、韓国、アメリカ等々世界に広まりつつあります。

日本歴史の中、元禄の頃より唄い継がれてきた安来節は百姓仕事ほかいろいろの仕事の中から生まれた故郷の民謡で一声二節と言われ現在の私たちに伝わってきた。この唄は安来節、出雲節、伯耆節、さんこ節等とも言われ北前船（幕末の日本海を舞台に駆け抜けた海の豪商・石川県金沢市・銭屋五兵衛）等物資の交流により文化的に唄い継がれ全国的に広まっていった。

現在、山陰の文化、いや日本の文化的価値は高く評価されています。今後はわれわれ会員が主役となってふれあいと信頼の中で練習、研鑽を深め技量が上達することが保存会員の大きな財産であります。活力みなぎる健康で生き生きと、また生涯学習の一環として郷土の優れた芸術文化の唄、絃、鼓、踊り、銭太鼓等の充実を図り、自分一人の財産でなく大きくいえば国の財産であると思います。

安来節演芸館を拠点として安来節保存会創立百周年を迎える事業等にも取り組む計画していかなければなりません。各地方の民謡団体とも交流を深めながら更なる普及・発展に取り組み努力をして行きます。

会員の皆様をはじめ、関係各位のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

庶民の目線で筆をとる
―ジャーナリスト永井瓢斎の人となり―㊦

並河健蔵

前号（第二十八号）のあらまし

①『出雲国風土記』の毘売崎の伝承で知られている語臣（かたりのおみ）猪麻呂（いまろ）を顕彰して、安来市内に建立された彫像の容貌は、安来市出身のジャーナリスト永井瓢斎の顔を模したものである。

②瓢斎の生家は、江戸時代から続く鉄問屋であったが、明治維新となり、加えて西洋の鉄鋼の輸入によって、これまでのたたら製鉄による和鉄が不振となり、家運は衰退した。

③瓢斎は苦学の末、大正元年（一九一二）に三十歳の晩学生とした東京大学を卒業した。

④瓢斎は大阪朝日新聞社に入り、若輩で京都支局長を務めた後、本社に戻り論説委員となりコラム「天声人語」を担当して健筆をふるい、朝日新聞の紙価を大いに高めた。

○　○

永井瓢斎はこの「天声人語」に新風を吹きこみ、独自の時事俳句で締めくくる絶妙の文章が評判をよんで、多くの愛読者がいた。そこで新聞社を定年退職してから、自ら主宰となり俳句誌『趣味』を発刊し、「下手よ集まれ」をキャッチフレーズとした。同好者はたちまち集り、会員は四千人に達したという。

「下手よ集まれ」という趣旨は、「下手でありたいという願望ではなく、みだりに高慢増長しない」ことを念頭においたものであった。昭和十三年七月号から瓢斎の次の二句を紹介しよう。やさしくてユーモアがある。

・扇風機あふり逃がせし螢かな
・握る掌のムヅ掻ゆく螢光りけり

「俳句幼稚園」の欄では、初心者の俳句を懇ろに添削し、指導している。例えば「風鈴の音や浄土の餘り風」を「風鈴の鳴るや狭庭の餘り風」とし、「鹿を撮る妻美しや風薫る」は「鹿とともに妻を写せり風薫る」と添削している。また「口づけし清水に山の匂ひかな」は、「苔の匂ひ」とやりそうな所を「山の匂ひ」と大きく言ったのが面白いといって採用している。

俳画「麦畑の農夫」

瓢斎は画業にも精通した。もともと学生時代から洋画が好きで、大正四年刊行の『安来港誌』の表紙は彼の作で、白樺の林に若葉がきらめくような情景をデザインした。俗っぽさがなくすっきりとしやれている。のち文人画家富岡鉄斎に私淑して、俳画に独特の境地を開いた。諧謔と機知に富んだ画風は、大衆に広く親しまれた。こうしてみると瓢斎の真骨頂は、俳画であれ、時事評論であれ、常に庶民の目線の高さで筆をとったところにある。

瓢斎は芭蕉の遺跡として知られる京都嵯峨の落柿舎の復興に努めたり、山陰鎮撫使一行をもてなした玄丹お加代を顕彰したり、多くの著書を成して幅広い活躍をした。

前号冒頭に記した語臣猪麻呂について『語部への一考察』と題する著書がある。これによると毘売崎の伝承を①事件発生が天武天皇二年七月十三日と『出雲国風土記』に正確に明記されていること②事件は『出雲国風土記』完成の六十年前であること③和爾（わに）は出雲地方では鱶鮫（ふかざめ）である、として単なる説話ではなく、まさしく史実であると説く。また「語り」は呪文とみて、語臣猪麻呂は神道行者であろうと推論している。瓢斎の論考は諸文献に基づく断定と思慮深い推論であり、面目躍如たるものがある。猪麻呂の彫像の顔立ちを若き日の精悍な瓢斎に似せたことは、誠にふさわしいことと言えるのである。

瓢斎は町内会長として活躍しているさ中、昭和二十年八月五日、関西大空襲で焼夷弾の直撃を受けて、翌六日死去した。享年六十五歳であった。

私と安来節

安来節との出会い

資格審査員
五代目 富田徳之助
（智頭支部）

この度、安来節保存会より資格審査員にご推薦賜りました。これ偏に諸先生方を始め、皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。重責を感ずると共に身の引き締まる思いです。

――安来節との出会い――

幼少の頃から安来節を聞いて育ち、昭和四十七年父に三味線と鼓を習い始め、翌年には智頭支部が結成され父の勧めで保存会に入会、私の安来節の原点となりました。昭和五十年には支部の講習会に故家元名人三代目富田徳之助師匠を招き、私にとって生涯忘れる事の出来ない師匠との運命の出会いとなりました。出囃子や義太夫の曲を主に教えて頂き、中でも一番最初に教わった思い出の曲は、すくい撥が上手くなる為に一生懸命弾いた一下がり調子の「ワルツ」という素晴らしい曲でした。徳之助の三味線の極意は如何にすくい撥や二枚撥を綺麗に鮮やかに決め、かつ半間を如何に生かすかにあったようです。正間というのはテンポあるいは手拍子に合わせる弾き方、大間、半間というのはテンポとテンポの間、手拍子の手を開いた時に弾くやり方、正間ばかりだと歌にくっつき過ぎる。間違いはないが単調に流れる。そこで正間の中に如何に効果的に半間を配して面白くするか。遊ぶか。これが故初代富田徳之助先生の心を砕いた点だそうです。この弾き方が即かず離れずという今の安来節三味線の弾き方に、そのまま引き継がれています。伝統文化の尊さ、大切さを教えて頂いた事、心から感謝しております。先人方から渡された襷に込められた「安来節」という伝統文化の奥深さをこれからも勉強しつつ、微力ながら安来節保存会発展に務めていきたいと思います。

偉大な師匠に感謝！

資格審査員
一宇川　勤
（本部道場）

この度、資格審査員を拝命し、身の引き締まる思いであります。更なる安来節普及発展の為に精一杯、尽くす覚悟でございます。皆様にはご協力いただきます様よろしくお願い申し上げます。

約三十年前に師匠、丸瀬一宇先生に師事し、一ヶ月程で師匠に米子の皆生温泉の旅館に連れられ森芸能社で約八年間ほとんど毎晩五～六回どじょうすくい、鼓と旅館の舞台に立ちました。初めの頃はなんとかどじょうすくいが踊れる程度で、舞台に出て、掬い出す時も「一・二・三・四・五・六」と口ずさみながら、また次はどうするのか頭の中で思い出しながら、踊り続けました。師匠に「次の舞台では、あそこはこうして、ああして」と少しでも上達するように助言をしていただきました。踊りが師範に昇格し、師匠の許可を得て、大阪、名古屋、東京と教室を作り、約二十二年間、一人でも多くの安来節愛好者をと思い、ほとんど毎月特急と新幹線に乗り、教室に通い続けました。周りから見ればうまくやっているように見えたようですが、なかなか会員が増えず、増えたかと思えば減るという繰り返しでした。妻に叱られながら涙が出る思いで、今日まで頑張って来ました。今私があるのも偉大な師匠に出会え、また保存会、本部道場の諸先輩、皆様方のご指導の賜と深く感謝を致しております。

今後とも何卒よろしくお願い致します。最後に妻にありがとう。

私と安来節

唄・絃 大師範
清山満智子
（本部道場）

私の安来節の始まりは二十才頃、保存会の方に出会い、習い始めたのがきっかけでした。

芸は身を助けるという諺がありますが、この頃に後に生涯勤務する事になった職場に就かせてもらいました。仕事の都合で四年で休会し、その後二十六年経てから再入会致しました。

平成十七年に絃で大師範に昇格させていただき、この度の唄い初め会に於いて唄で大師範に昇格させていただきました。今日迄導いて下さった師匠の方々、暖かく励まして下さった保存会の先生方、先輩の皆様、共に学んだ方々のお陰と厚く感謝申し上げてる次第です。

これ迄多くの年月を重ねて来ましたが安来節に飽きる事がありません。技術を会得していくにつれ、自分の目標が見えて来ます。奥が深くやり甲斐のある民謡だと思います。嬉しい事に、よきお弟子さんに恵まれ、いかにしてより覚えていただこうかと苦心するのが楽しみです。お弟子さんの一生懸命の姿が自分の過去にも重なり、愛おしく思います。安来節を習って良かったなぁと思って下さる人が一人でも多くなり、安来節保存会の発展につながるよう努力致しますのでどうか変わりませずよろしくお願い申し上げます。

東北地方に教室開設（4月）

◎宮城県仙台市
　仙台青葉カルチャーセンター
◎福島県・福島市・郡山市
　（1）ヨークカルチャーセンター福島
　（2）ヨークカルチャーセンター郡山

（問い合せ）安来節保存会東京支部事務局
TEL 03－3361－0488
FAX 03－3361－4293

安来節保存会 大利根支部

関東各地と東北仙台に部会があります。
近くの部会で、唄・絃・鼓・どじょう
掬い踊・銭太鼓など始めませんか。

（連絡先）大利根支部長 玉川隆正
東京都板橋区高島平３丁目10－23－205
TEL 03-3938-7224　FAX 03-3938-9755

会員の声コーナー

湖陵支部との交流で貴重な体験を得る！

東京支部長
棚橋　保

二〇〇九年十一月一日、新宿区の労音大久保会館で第十三回目の支部発表会を行いました。今回の発表会には、湖陵支部・周藤恭一師のご家族五名（伏子師、翔平さん、絵梨子さん、真理子さん）が特別ゲストとして遠路はるばるかけつけてくれました。

成果として第一にゲストによる安来節の唄、絃、鼓、銭太鼓、太鼓の演奏に支部会員魅了され、あのようにどれでも出来る様になれば、どんなに楽しい事かと話し合い、安来節をもっともっと勉強していく気持ちがお互い沸いてきた事です。

第二にゲストの方々の力を借りて一緒に伴奏出来た事です。とりわけ銭太鼓は共に竹内流（竹内松子家元）で意気を合わせて打てて、見応えのあるものとなった。

第三にゲストの総出演で踊りの最高齢（九十七歳）の尾上武夫さんの踊りの伴奏をしていただき、二度と見られない舞台となった。

その他、支部会員の多芸の一つで手品の片倉新一郎さんの「人が空中に浮く」大掛の仕掛に会場からはわれんばかりの拍手がおき、語り草ともなり会員相互の絆が強まる要因の一つともなりました。

今後共、今回の経験を活かし、安来節普及発展に取り組んで行きたいと思っている。

私と安来節との出合い

米子支部
田子よし子

私と安来節が出合ったのは、幼い頃、母は御祝い事があると必ず唄ったものです。母は保存会会員ではありませんが、祖母が子守唄の様に唄っていたので自然に覚えたそうです。私も「大人になったら唄いたいなぁー」と思っていました。

昭和六十二年、知人の紹介で保存会会員となりました。「早く上手になりたい、うまくなりたい」と一途な気持ちで練習に励みましたが、思う様に唄えません。「声が小さい、母音の上りがない」と母によく言われました。平成五年、師範に合格、とても嬉しかった事を思い出します。師範になったら「上手にならないといけない」という思いが頭から離れる事はありませんでした。

平成十年、野坂亮利先生との出会いがあり、厳しくも温かい御指導の元、声も出る様になり、たくさんの事を学びました。先生が亡くなられる前頃「やっと、わしが思う様な唄に近づいて来たな」と言われ、喜びと同時に責任を感じ、日々学び、感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。

人生の喜び、悲しみ、絶望、私は安来節（唄）にどれだけ支えられ、助けられたか知れません。安来節とは奥が深く、終わりのない旅を続けながら、より一層精進し、支部そして保存会に貢献出来る様努力して行きたいと思っております。これからの人生に夫婦二人三脚で後輩の指導、新人発掘に頑張り、育てたいと思っております。保存会会員として凛とした人間でいられるよう心掛け、幸せな人生を送られるよう…まだ未熟な私ですが今後共御指導の程よろしくお願い致します。

大小鼓製造卸販売
杉本鼓店
住　　所：島根県松江市馬潟町360-13
電話・FAX：0852-37-2033
E-mail：ks36013@web-sanin.co.jp
※通信販売も致しますので、お気軽にお電話ください。
修理、下取りもご相談ください。

㈲仁木三味線
製造・販売/修理　三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓
〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1
TEL 045(713)4319 FAX 045(741)4796
HPhttp://www.syamisen.com/

会員の声コーナー

どじょう掬い踊りに共感 人生を輝かせる宝に

大利根支部
芝原耕造

二〇〇一年一月、神奈川県のある新春のつどいで「どじょうすくい踊り」に出合った。胸がときめき、心底感激。ひょうきんなスタイルと絶妙な腰の動きに笑った。素朴な生活感とどろくさい人間の風情がジーンと伝わってきた。「ひょっとして自分が踊れたらどんな格好に」と想像しただけで面白かった。そんな好奇心がきっかけでやがて保存会に入会して、今日の大利根支部の会員になれた事は望外の喜びと誇りに思える。

不器用で覚えの悪い自分が思いついたのが会社の風呂場での練習。それも定年を間近に控えての出来事。夜勤の休憩時間に社員の大きな浴槽（風呂場）にザルを持ち込み、川に見立てて重みを実感する事であった。誰も見ていない事を確認して始めたのだが、しばらくしてドアの方から声が掛かった。「芝原さん何してるの」と若い後輩達に見つかってしまった。恥とドジで大笑い。

今は時々、個人と部会の皆さんで地元の敬老会や医療施設を慰問したり、演芸会で「どじょう掬い踊り」等を披露。踊りと合わせ腹話術の人形「やすけ」を連れて仲間達と三宅島や日比谷の派遣村への激励等にも参加。励みのつもりが逆に元気や癒しをもらう時も多い。

今後も自分にとって安来節が人生を豊かに輝かせてくれる宝にしたい。それには安来節保存会の踊りや唄や銭太鼓等の優れた伝統文化にふれる喜びと同時に伝承する事の努力が重要。技量の向上と合わせ自分の生き方と品格も問われる重みがある事を常に忘れてはいけないのだと思う。

安来節と私

江田島能美支部
眞澤洋枝

安来節に出合ったのは昭和五十四年の夏でした。当時、地元の婦人会で民謡を教えていると聞きました。その頃、私は友達もいなくてその会に入会して、少しでも誰かとのつながりができればと思っておりました。そして出来る事なら少しでも自分で唄えるようになってみたいという気持ちでした。そこで石川弘一先生との出会いでした。声を出して歌うなど高校時代以来です。先生は本当に大変だったと思います。

昭和五十七年、江田島能美支部が設立され、これを記念して発表会が行われました。本部より諸先生方が多数おいでくださり、本場正調の安来節披露公演を挙げて頂きました。その時の驚き、感動、これが本場の安来節！　言葉に表す事も出来ない程の素晴らしさでした。これから習って、教えて頂く私はこのように唄う事が出来るのだろうか、という期待よりあまりの凄さに不安と畏れさえも感じさせました。それからは少しでもいいから「長く続けて習っていこう」という気持ちを持つようになりました。しかし、そうは言っても思うように唄う事が出来ないのが安来節です。「ふり、つっこみ」どれだけ指導を受けた事でしょうか、難しければ難しい程、簡単に諦める事が出来ないのが安来節ではないでしょうか。

おかげさまでお友達もでき、技倆の方はまだまだ未熟な私ですが、先生のご指導を受けてこれからも続けていきたいと思います。皆様よろしくお願い致します。

今の気持ちを問われれば。

三十年続けて
友の輪を広げ
共に唄わん　安来節

体験集 「栃木県日光市民文化芸能大会」の檜舞台に立つ！

東京支部
野崎幸枝

民舞「正調安来節」出演のパンフレットを見て、これは勉強になると文化センターへ一目散で行ったのは一昨年十一月の事である。いよいよ出番が来た期待して舞台を……残念、無念それは「正調どじょうすくい踊り」では無く、ただのドタバタ踊り、豆絞り手拭いはほっかぶり、鼻の穴には二本棒、おてもやんの赤いホホ、品が無く、がっかりした。「何が正調だ！やたらに正調など付けるな」と思った。自分自身で誓う、「まだスタート台に立ったばかりの私ですが、来年こそは一生懸命励んでこれが島根県本場の正調どじょうすくい踊りである事を市民の観衆に見てもらおう」と考えました。

私は退職後、老人福祉施設等でボランティア活動をしたい夢があり、安来節保存会流の楽しい笑いのある踊りとめぐりあった事は本当に幸運です。宇都宮まで東京から指導に来て下さる踊り日本一を獲得された大師範の棚橋師匠のおかげであると感謝致します。

そして平成二十一年十一月「日光市民文化芸能大会」に出場決定！いよいよ檜舞台に立つ時が来ました。「三十三番民舞、正調どじょうすくい踊り出演者　野崎幸枝さん…」とアナウンスされた「さあ、出番だ！」度胸をすえて無事に正調どじょうすくい踊りを演じきった。観衆の拍手喝采！何だか自分に達成感が湧き、胸が一杯になりました。未熟者ですがこれからも頑張ります。有難う御座いました。

平成22年唄い初め会支部競演結果

安来市長賞	加茂支部
安来市議会議長賞	広島中支部
安来市観光協会長賞	本部道場
安来商工会議所会頭賞	神門支部
山陰放送賞	松江支部
足立美術館賞	湖陵支部
家納喜賞	和歌山支部
安来節演芸館賞	宍道支部

安来節保存会会員特典！

次の施設で安来節保存会会員証をご提示されますと次の特典が受けられます。

- 足立美術館入館料 2,200円 が 2,000円 となります。
- 安来節演芸館　観賞料半額